

2025年5月11日 第二礼拝

説教題「そんなことがあってはならない」ルカ福音書 20 章 9～19 節

主任牧師 加藤 誠

「彼らはこれを聞いて、『そんなことがあってはなりません』と言った。」(ルカ20:16)

二週間前の礼拝で「復活の信仰は、イースターの時期だけでなく、クリスチャンがそれにより毎日を生き、それにより最後に死ぬ信仰なのだ」という W・バークレーの言葉を紹介しました。イースターからペンテコステに向かって歩むこの時、今朝も「復活の信仰」について聖書から聴いていきたいと思います。

とは言うものの、今朝ご一緒に聴いた「ぶどう園と農夫のたとえ」は、復活の希望からはほど遠い、読んだ後に心にザラザラしたものが残る、後味の悪い話です。このたとえ話が好きだ…という人はまずいないのではないのでしょうか。

登場するのは、主人に対して不遜で強欲な農夫たち。こんなことをして主人の相続財産を自分たちのものにできると考えるなんて、浅はかで愚かとしか言えない連中です。主イエスは言います。「さて、ぶどう園の主人は農夫たちをどうするだろうか。戻って来て農夫たちを殺し…」。なんと、悲惨な結末でしょうか。農夫たちの浅はかで、愚かな行動が、結局は自分たちの破滅で終わっていきます。これを聞いた人々は「そんなことがあってはなりません」と言いました。決してあってはならない。そうです。ここにはまったく救いも希望も見えません。主イエスは、いったいこのたとえ話にどのような意味を込めて語られたのでしょうか。

このたとえ話に出てくる主人は神。農夫はイスラエルであり、今の私たちでもある。そして、そこに派遣された僕は預言者たちで、最後に送られたのが神の独り子イエス・キリスト。不遜で強欲なイスラエルと私たちは、神から貸し与えられているぶどう園、つまりこの世界を、愚かにも自分たちのものにしようと考えて、預言者たちを追い返し、独り子イエス・キリストを十字架につけて殺してしまった。いや、今も十字架につけ続けている。実に自分勝手な貪欲に生きている私たちの破滅的な生き方を「それでいいのか？」と厳しく問うている、たとえ話です。

ただ今回、このたとえ話を読み直していて、ハッとさせられる部分がありました。それは 15 節です。「そして、息子をぶどう園の外にほうり出して殺してしまった」。ここまでは「過去形」で、すでに起こったこととして語られていますが、その次の「さて、このぶどう園の主人は農夫たちをどうするだろうか。戻って来て、この農夫たちを殺し…違いはない」は、「まだ現実には起こっていない」未来のことがらです。主イエスは「どうすると思う？」と尋ねていますが、「主人が戻って来たら農夫たちを殺すだろう」というのは推測であって、まだそれは現実には起こっていない。つまり農

夫たちが一人息子を殺したけれど、その後のぶどう園の主人の行動については「まだ留保されている」のです。普通に考えたなら一人息子を殺した農夫たちをそのまま生かしておくわけにはいかない。「殺しには殺しを」と、独り息子を殺した責任を問うて報復してもよいのに、その報復の裁きは留保されているわけです。

では、どうなるのか。17節「主イエスは彼らを見つめて言われた」。ここからだ、大事だぞ、よく聞けということでしょう。「家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった」と。実はこれは詩編118編22節の言葉です。その詩編はこう続きます。「これは主の御業。わたしたちの目には驚くべきこと。今日こそ主の御業の日。今日を喜び祝い、喜び躍ろう」。

「家を建てる者の捨てた石」、つまり大工たちが「こんな石は使えない」と捨てた石を、しかし神はお用いになって神の家を建てる隅の親石とされた。その驚くべき神の御業を賛美しよう…と、詩編118編は招いているわけですが、ここに主イエスが一番伝えたいことが込められているのではないだろうかとわたしは受け取りました。

つまりこういうことです。「家を建てる者の捨てた石」とは主イエスのこと。主イエスは人々に捨てられた。「お前は役に立たないやつだ」と。神から人びとの救いのために遣わされたのに、浅はかで貪欲な人々によって理不尽にも殺されてしまった。そのように大切な神の独り子を葬って神の家を自分たちのものにして奪おうとした不遜で強欲な人々は、神の報復の厳しい裁きを受けて当然なのに、神は、家を建てる者が捨てた石を「隅の親石」とされた。人々が殺したイエスを人々を「救う隅の親石」として復活させ、殺人の罪を問われて裁かれて当然の者たちの命を「救うため」の「隅の親石」とされたのです。「ぶどう園と農夫のたとえ話」そのものは私たちの罪を問うとても厳しい話ですが、そこには実は新しい命への救いの希望が込められた神の招きを主イエスは語られたということです。

神への感謝を忘れ、自らの貪欲に目を閉ざされ、神に対して反抗的で、敵対的な生き方しかできていない私たち。その的外れな生き方が招く、悲しい滅びの結末。厳しい裁きが下されて当然の者たちに対して、しかし神は私たちが捨てた石、主イエスを復活させ、神の救いになお招き続けてくださっているという、驚くべき神の御業をあらわされました。

それゆえに、この「ぶどう園と農夫たち」のたとえ話は、私たちの浅はかさと愚かさが「そんなことがあってはなりません」という世界の悲惨を生みだしている状況を厳しく問うていると同時に、にもかかわらず十字架にあらわされた主イエスの愛と赦しと復活の命の希望を大切に受け取り、神さまの恵みに応答的に生きていく祝福に私たちが招いているたとえ話なのです。この厳しいたとえ話に込められている「復活の信仰」への招きを受けていきましょう。